



七金譯說附錄
上下

八拾四番

洋学文庫
文庫 8
C 270





七金譯說附錄卷之上



叔^テ列^ル鹿^ク古^ク諸^ク金^ク礦^クの部

Bank!

甲のいゝく汝鑛坑に行きて視らるや
如何予親しく汝に視せしむ
屬さ事しを命し置らりき

乙のいゝく我姑く悉く視らる事を



得たり君の懇切に於て予謝
し盡く流すを埒と

甲のいさく予悉く汝を見を埒と
たり此の事を命し置し汝を
汝これを見ししるあふん

乙のいさく最初は先ッ鏡鏡を二
雷に於て堀り出を見たり其
堀り埒も物も質燥きく黒色

又佗の一處に於ては鏡石を堀
り是亦水に於て溶化せんを
とと揚さく末と為せり又一處
に於ては其土砂と混和し
を四尺方の深さ二尺の平器に納
め是を流水に打て強し其
中を攪勻せりこれ鏡砂に重り
る器底に留り土に軽りれ其
流水の勢に随て流き去れがなり
倍其水に於ては鏡鏡十五ト子

此を鑛化しつゝ木炭六十ト子
こを燃せしめて得る所の鑛二
千五百斤或ハ三千五百斤あり
此國

按らるゝ拂郎察をり

随、意ニ掘る事一を許し税もす
其業人の害とありさうやう小僅
一ト子に小就る二十ベニニク
ことらよとらりて是國人の小此業を

勵まゝ免るゝ自々國益とあるん
る為かり依其鑛鑛多ては鑛化
とぬ取除き又其跡ハ別
鑛鑛と木炭とを細まゝ新
鑛化も但し其鑛鑛の上ハ毎
引止を凡そ其鑛鑛の一を餘
を載しと志らさぬが好く鑛化
事あり汝此所以を知らや
甲のいさゝ引止を甚だ鑛子を

帯びたるものありしは是を加へて
膏は其結の殖たるのみありど尚
もやうは熔化さればなり鑛鑛ハ
皆土砂を帯ひたるものなり故は是
を分離除去するに水を盛し其
器の中子投して洗ふ是より其
砂土大抵を去ふ依其鑛の熔
化ししを見えは恰も火の波の
流動するが如く沸騰し上下
は轉動するなり依其火をとおして

る時を鎮つる一塊たる即ちこの
火波をみるものも其内の砂を
も帯びたる塩をかり火強ゆる時
は是亦一塊たるなり其中は混
しかりし土を熔化しし
黒色の灰粉とかりなり砂ハ鑛たる
軽なりれば熔けし上は浮び鑛は
重きなり下は沈む火力を以て
自らしるれば別を其灰粉とかり
る土を薄片とかりて鑛或る

溶化し硝子様ふりり多砂或は
其内より自り存りる自然塩と成
り去るありし此灰粉は化しりる出
るの鏡と交和せる其土の多少
不依り鏡質を異めたり此土混和
する事愈々多り水は鏡はいよ
粗みりり愈々脆く愈堅く愈悪
此の返りりりる其土事のいよ
少き時と愈密實りり愈鑄
造りる愈軟柔めりり愈接む

厚くも愈々純粹りり其鋼鏡
小近し此のりり鏡の害をあると土
事を除去りりる鏡を溶化し
るう水は一味を加ふるり志るり時
る鏡事を別事あり只其土事
のりを去るあり其法を「ウー」の
塩とを加え溶化するり志るり時
砂石解けり硝子とるり鏡鏡中の
土事悉く此硝子中より集り併し
「ウー」あるり時り「ウー」に
水中の及ひ

河砂を加え、溶化を促し、水又
其土を除去し、匠工は固くして
を引出し、或は砂石を用ひ、伐り
は灰粉原と、煨火し、土を水が
續續にれ、固く精純なるが、
土をよき土を如増するが、
汚穢をとり、唯此灰ハ炭は
着き、錆を及び、錆石等を
集め、水を溶化し、
用ひ、則其集め、物の上、
これ

を塗つて着け、而して火を投じ、
より、志う、時と錆解け、其内
より、外に漏れ、唯其下
底の、流き、
中より

乙の、予嘗て馬具匠、
の、仕方を、見、
即ち、
竈の、満ち、其上を、
を、燃し、且其速は、
溶化せん、為め

Slak Cinders.

又其鑄化しし方鑄の下底より流き
集めんと爲めしき數々筈より水
をつけ電の上を濕せり

甲のいしき予は匠工の所作を見
て後ひし事予の大幸なりれは色
まじり 倭又木炭と鑄石とを交和
ししものハ何と云ふ乎

乙のいしき此を電底於て鑄化し

りたり 電底を斜よりりし一方ハ
高く一方を低くしれは鑄石の
道孔を穿ちたり此門口を鑄石
の鑄化する時刻を窺ひし開く
かりし志りし時を鑄石鑄けし湯と
りりし流き出川られを砂あり
造りし溝或は諸般の鑄形の
中より受るなり即ち其鑄形を炮
銃版炮燂火矢柘榴丸短火炮壺瓶火
銃等種々あり見ると甚樂し

甲のいゝく其砂よき造き溝の内よ
河さ入きくは 鑿も 竹よ用ふふ哉

乙のいゝく 此溝の内よ 注き入きくは
鑿も 形長くくは 接く且三角の
此を 扱予しあけく其重廿二千二
百觔ろろ けり又一千八百觔けり
けり 料を 木板の上よ 載せ引く
此鑿條の一端を 竈よ入ふ

此竈を曰子エル。チーへじと名は

くふぢり

此の内よ 於く又此を 軟よ熔し
其鑿けくは 所を 重廿凡六十觔
程も 具ろろを 以て 断ち方ち取
て 小槌を 以て 此を 徐くよ 打けり
かり 是 此鑿を 質密く 且堅く
あつんり 為らる 而して 後又こねを
曰子ールチーへじ 小温免 而して
此を 鑿造の スレーヂよ 取し 重さ
六百觔けり 大槌めく 打くしむ

其うねを打ッ響^{ヲト}遙一里餘を隔
々開々^ヲ但一此槌々水車
を以々動揺一自然又打ッ^ヲな
設け造き^ヲの^ヲ匠人其傍^ニ
^ヲ其鑛挺を動^シ操^ス
これ^ニ方形^ニ打^スも^ニ
也

甲のい^ニ匠人此大槌を以^テ鑛を
打ッ時を燒化^ス一^ニ一^ニ土及

此他異質の物去^リ々々^ニ眼を打
ち^テ一^ニ質密實^ニな^リ一^ニ且鑄^ル
又^ニ一^ニ一^ニ

乙のい^ニ斯^ク大槌を以^テ打^チ
後^ニ一^ニ一^ニ一^ニ電^ニな^リ
燒^クこれ其上^ニ附^着一^ニ燒^け
一^ニ一^ニ土^の片^と一^ニ
と^ニ一^ニ斯^ク
一^ニ一^ニ一^ニ一^ニ

良一此方形の鑄を造るに
の上よ載せ平らりたる三角形の物
よ折ち為し以て紙を造る或は
み挺干し或は又版とあり置
て諸用よ充つ其厚薄廣狭
種とあり備え置く

甲のいさく汝好く心を用ひて観ふ
事一感もるは堪へり

乙のいさく右のいさく製法を施し
物といえども尚土膏を合じ
此を精純よせんときり
一ルヲ一へによ敷後致し
焼き
かナシキの上よ載せし
打つ此の法
敷後施す時よ甚密實よ
且純精よるる
但し此法を
施す毎よ其分量減少
即ち荒練一千五百筋
此法を施す時よ
終ふ一千筋の

精練とらる斯のこゝ量と漸々
減少し日費ハ甚多ク然レバ精練ハ
容易ありとらるものごと

甲のいさゝ山中練車トイヌルモ一レシを
築こゝゝが甚辨利とらるゆゑん

乙のいさゝ水路及び樹木も取りぬバ
我既ニ此を築んるを會とらる

志うふよ或人のいさゝトイヌルモ一
レシを築くもちトヌ一レ

自註よいさゝ此も長さ八尺高さ
四尺幅三尺五寸の練を流すもの
ごと

を價少ありしと求め得る水が築
くともある損亡とらるとあるよ
企をハ廢せり

甲のいそく「エイスルモール」を築ん
く右ふいえふ如く「スニール」の價
又炭薪の失墜等些少あつた
る事必せり「佐汝斯」のいそく鑛
の製法を見よ「水」が「水」は鑛の品を
鑑定する事習ひ知る事

乙のいそく「我」既ニ鑛鑛の製法及び
「挺干」とあり其術を知り得る今
又其術をいそく「鑛」を「混和」し

いそく異質の物を如何に分離し
純精よある法のを得ん事を欲す
れば請ふ希くは「鋼鑛」及び「フリッキ」
の製法をいそく「示」「示」「示」此ら
秘法ありしを「示」

甲のいそく「尋常」の鑛を以て「鋼鑛」
を製する事「獨逸」都人の業
業なり其法を「電」り此は純鑛の打
延しする大なる延鑛を細き火を

燃——其鏡の三か二自ら減少する
や——水を焼き——鎔化を即ち
其残る所のものを純精の鋼鏡とする
又匠人の流は依るハ塩素を除去
——る灰中より細免く焼くがより
又獸角の屑より包き——焼き——水を
製法——法あり

フリツキ——製法を——他
り——延——る鏡版は錫を銜し

る物より其うれより用ふる鏡版は
最初は水と醋と——醋の——
——を交和——る物の中より投——
精くあり——其後は海綿と膠水
を付け此を以て其版を塗る其
上は鹵砂の末より酒石塩の極末
をすりつけ深さ一寸八分程度の鏡造
鏡壺の中より錫を一杯鎔——置き
其中よりこれを投——る半
秒時——る時より錫其鏡版より析

しおのつゝブリツ レとるる 此らる 糸
後他金の説をいせん

予数く諸國遍歴家より諸金の
話を聞ふ事あり 此を汝は傳
へ説く事あり 其話はいまもこれ金
と山内の土中及び河底の砂中より
と川、昔は其質を同水も其河底
より得る所一の金と皆細粒なりこれ
も砂金ストラゴートと名はる 思ふよりこれ金

これと金山より流るる露の流
水かの川より山中の細粒とるる金
を引く 河中は注ぐ者ありん
人皆是をとり 附着する所泥
砂を分離しこれと分離する
最初は水を洗ひ灌ぎ而して
後水銀を用ひて精製す

按るは其水銀とりし質甚し
重くしる流動し白色とるる
よのより土中の産物なり

より流動質をありてよりありみ硫
黄及び土と混和してありつゝ
一種の硬き金とありてありて
を人呼んて朱砂ニールと名つゝこの
朱砂の如きと樹を以て製して
用ゝ即ち硫黄と水銀とを
合せ以て造る其自然生の朱砂
を火力を以てこれと合せて
る水銀を硫黄と分離して取
る為に水銀と一種の性ありて

好く金銀と混和を

右の所謂河底より取らる砂金
を炭酸石灰の灌して泥土を除
き取り而して尚此を精純と
するに欲する時其水銀と
砂金の上より水銀を採らるる
時は水銀悉く其金を吸ひ集
め取りて獨り土等の之を
水銀を取りて壺に入て火に出

不^レ時^ニ水銀を煮^ク上^ニ登^ル一^ツく
器^ニ持^リ金^を而^シ其^ノ底^ニ留^ル又^シ其^ノ
水銀を草袋^ニ入^シ絞^リて^モよし
之^ノ銀^を草^ノの^子眼^を穿^テ外^ニ漏^ル也
持^リ金^の其^ノ袋^中小^く中^家なる
ことなき

坑^中に於^テ淨^ク所^ノの^金を^土
中^或石^中に塊^をあ^リ此^ノ人
其^ノ大^小の^限ら^ず皆^テ列^レイ^スに^と名

は^くる^物凡^そ其^ノ重^サ二^分或^は四^分
列^レイ^スの^一つ^りみ^時小^くハ^二三^分
ル^クら^うも^あり^人れ^を取^ルも^う
洗^ハ灌^ぐら^う此^ノ金^を粘^着と^らう^ハ
大^力を^用じ^も其^ノ法^甚簡^便な^り
亦^ハ失^費あ^らぬ^が此^ノを^良金^とす^ハ此^ノ
法^ニシ^テ地^下に^於て^金を^製成^スる^ハ用
ふ^るか^り

金^を都^て石^中に^あり^其金^鏡を^望

硬^クシ^ク其内^ニ小^小金塊^を含^含む其
光^光り^り合^合む所^所の金^の多^多少^少固^固り
厚^厚薄^薄均^均す固^固着^着る所^所の
土^土中^中に^に其^其金^金脈^脈理^理を^を相^相連^連に
枝^枝條^條を^を其^其長^長短^短及^及以^以厚^厚薄^薄
を^を金^金の^の多^多少^少の^の値^値不^不均^均なり^{なり}小^小金^金
片^片及^及以^以金^金點^點石^石と^と交^交和^和さ^さる^るこ^これ
を^を丸^丸メ^メル^ル或^或を^を珠^珠玉^玉の^の類^類に^に似^似せ^せる^る
事^事あり^{あり}れ^れる^る自^自然^然に^に流^流水^水に^に引
き^きら^られ^れる^る其^其石^石は^は六^六角^角に^に似^似せ^せる^る

物あり

金^金と^と混^混和^和し^し汚^汚穢^穢の^の物^物を^を引^引き
か^かき^き出^出す^す其^其金^金を^を鉄^鉄臼^臼に^に擣^擣み^み
碎^碎じ^じ此^此を^を丸^丸メ^メル^ルこ^これ^れを^を送^送る^る
研^研磨^磨し^し細^細末^末と^とす^す而^而し^して^て後^後に^に
銅^銅の^の篩^篩を^を以^以て^て濾^濾し^し過^過す^す水^水を^を
水^水銀^銀と^とす^すこ^これ^れを^を交^交へ^へる^る泥^泥と^とす^す
器^器に^に入^入れ^れ日^日陽^陽に^に於^於て^て擣^擣る^る事^事
二^二三^三日^日の^の間^間に^に行^行は^はす^す然^然る^る時^時に^に水^水銀^銀

ゆき其内は含るる金を悉く
吸ひ集め土塊粗砂の類の悉く
器の底に残る留るる乃ち器を
傾け水を流す時其土砂を水
とともに除き去り其器底は細き
物を即ち金及水銀と細き土を
此を去らししとき此上は若く
熱湯を注ぎ入るる又其水銀を
火力を以て蒸散せしむる時
金の残るる亦も此金を

いし金く純結あるを此を純金と
あきよハ強烈の分離劑を用ふ此
法を曰子しと名く

金を曰子しと名く
法數多あり

- 第一法はアニチモニアを用ふ
- 第二法は猛升汞丹を以て
- 第三法は強猛水を用ふ

第四法を鉛及び「ウエー」ドアに用
ふるなり

「ア」ンチモニヤシる金^{メタール}様一種の物よ
しきも頗るホトロトトしき似たり
此物と金と共ニ溶化せしむる時と
金の外の交雜せしむる諸金事及び
土事を以て集め寄せしむる合類し
黄金のこを殘を依りて金と汚穢の
物混交する事愈多きものハ「ア」ン

チモニアシを愈く多く合和せしむ
此と相共ニ溶化せしむる時と純金
を沉底し汚穢の物を「ア」ンチモニ
アシ共ニ泡の状をあらしむ其の上
に浮む斯のこを以て後塊凝し
せしむ火中にて揉み焼くなり
然る時と汚穢の物「ア」ンチモニ
アシ共ニ燃せしむ消散するなり

「ア」ブリマートトしち人の巧術を用ひし

水銀と食塩との精金を以て煉る
しつゝあるがごとく此と黄金と和して
溶化せしむる時は其黄金と混和
しつゝ物を蒸く煙とろりして蒸
散を曰ふルゲル^{ヒ子レニをア}ハ
ンチモニアとニエブリマー止を好て
用ひも其酸も此二品ハ俱に炭
素が水が其毒多きを恐ま取り扱
ふは容易ありしとて強酸水を
を用ひも恒よりれよ強酸水を

用ひしり

強水を硝石と膽礬の精金を火
力を用いて取りしつゝ水液ろり因
り考ふるは是も胆礬硝石
の酸金をしつゝ分離せしめ
しつゝあるがごとく煉家ふりしつゝ
よの代りしつゝ硝石の精金を用ふ此
精金を其黄金の外銀銅其餘諸
金の性質を存せりあるがごとくし

と解化し尤黄金と王水と投じて
水が立ち解化しこの王水としつ
と即消石の精を三十二錢の内
硝砂八錢を投じて化しつる
うり又硝石と石塩サルゲルニアとを等分
に合せ火力を以て是を蒸し燻
しつる精をとも用ひつる此精
亦黄金のうり解化しつる銅
紙及び此外の誌金を化せし
る奇ととゞく是を考ふるは銀

銅等の事眼を粗り此精を
至つ細密うりるは容易に其
眼を透入しつる銀銅の質を燻化
しつる事誌金をとゞくは解化
せしむると見ゆ可なりルゲル
は是の強水を好ん用ふ其
あり誌金昔の留黄金と自ら
混和しつる水が餘の誌金を化し
純金を其俵中しつる存在せし
むるは病めなり

「コルラ」の黄金と「コ子」レシレンと
欲せハ「モウル」ス。アルド「ミ」此位
の細うま「密」ろる土を以て泥と
る「此」を以て「漏斗」の形に堀を
作り「水」の右の黄金と并に「一」二
「コル」程の銀を加え「投」て「其」を
「溶」化せしむる「此」二品共「溶」化
し「混」化を而して「後」是を
水中に「投」て「斯」のことく「水」
「自」然に「沈」むる如き「案」の

小粒「ろ」る「水」

此小粒を「ろ」り「乾」し「一」陶器に「入」き
強水を加え

自説「小」い「ろ」る黄金「一」コル「毎」日
強水「一」觔を「投」て「ろ」る

蓋を「覆」ひ「焼」く「時」を「火」拵め「強」
水の「ろ」り「強」烈「小」ろり「一」小時を「経」て
「ろ」る「其」銀を「金」と「離」す

ま強水と共々蒸しより其蓋は附
着しそあつし塊凝し形ををり
猶り金の灰と多し壺底は沉着
し形のし後号と火と
おろし且其中は残り其銀の
を存し強水を去るなり其
残る所の金甚だ精潔なり
なり形のし金と尚純
粹よあさんと欸や若の金を
別の銀を加えし銀化を
なり

く化し取り出し
そと強水を扱し解し
解し又数回強水を入し
其金と混和し不物を除き
去るなり形のし
あし強水を扱し換金し
るさんとせば礬砂を
入し塊とるなり

このいしより尤怪し強水の異功なり

Marb.

獨り銀のこを解し金を化す事
こ能く事なるを依一コルクの金
を純精ふせんし二三コルクの銀
を費さふ所を如何とす水は
君云くもや其銀ハ強水と俱よ
し去ると

aus.

甲のいさく志くど其銀一アースも
失ふ事ある元の中を好むし
銀を化し其強水ハ壺よ入ま

其強水の七八倍りとの兩水を加え
其中よ一斤の銅を投ぎて然る
時を一晝夜の中よ化し強水の
多き悉く銀を離れ其銅よ集
ふ即ち銅を悉く消えぬのつら
強水と和同し緑色をあらし
其銀を悉く灰の状とありし
壺底よ沈む此灰を取らば壺
火の上せし溶化を急し集め
一塊の純銀とありたり

乙のいさく爰小童正のちちあり水が
者小いさく奇術を見事事しき
を是我よ於く遺恨なり

甲のいさく強水と以て諸金を解
化を離さるる實よ是明考なり
此法を榮めし人を一十四百年
の始よ在世の人ありし此人の大
功と謂はるる亦後又別法を説
く也

Koupil.

諸金を精製する第四の法何れ其
法を金或は銀ありても精製せん
と欲するもの其三四倍の鉛を加
えし銀化をせしむる時をこれ
は混和しるるもの悉く銀ととも
焼化しるる灰とより上よ浮きその
純精よりよりなる重銀の類をコウピ
ルの底に沈みしるるなり

銀の精粗の度を知り得るなり

Kowal.

その其粗銀の分量を試み置て是
をコーペルの術を施し而して後
にその分量は是れを改め見ると
其分量の減少する所を以てして
其内は混和する汚物の多少
其精粗の品類を知らずして金
を試みる別法有り然るに金と混
和する銅等を以て諸雜物を
除き去る物なり尤銀を志し
ては其内は銀を是れを以て

Engel.

除くをうしむるに金は其十四分の一の
銀の混和する時其金の位甚し
く下りて價亦卑し徳金は其純
精法を施し何程も其精粗は
ありしを知らずして假令は
エンゲルスの金は一エンゲルの純銀
を加えて其は鎔化し是を續の上
に置て薄く打延すと且て其内は
其内は包き置て疊
是を強水に鎔化し其内は

Kunt.

時々半エインゲルスの金を加え、一エインゲルスの銀と其金より自然に混和し、銀と一號と、純金の下に解化分離し、持り純金の下に、其金より混和し、此試法を以て其金の減少せし量及び其純精の量を位度を知らる。

このいづく予聞く數々重銀のキウ

Kraut.

といえらる其土地の官長より、其金銀は其國の記録を其上に記し、其銀品位を分別せしむる為め、誤けらるるのさうり、依中此デハルテといえらる、金銀の善悪精粗の質をいふ假令、此金と二十一半カラ、止の列ハルテ、其金二十一半を純金とし、二半を地物混和し、るをいふ。

かり即ちアムステルダムに等あり
諸細工に用ふる劣の金にれり
後よカラー止の義を解く尚
子固る會得るに等し他物の少
しと和せざるを最も純粹は
る上品なり銀も亦然る假令貴
金は加ふるといえども其銀の品
劣まるとも法大小に限るは一塊
一尺の金と志をらるる是を二十四
五分

自註小いも此一分を或は四分
或は八分或は十六分あるは

Kraut.
分量大小に限るは一塊金を二十
四分一々此毎分をカラー止と
名づく製煉法を施すとすえも
交和するものなく唯金のいろは
時々是を二十四カラー止のデバ
ルに質の金とすは是も二十四分の
内は純金の外なく甚は良品の金

といふらん如し製煉家二十四カラリ
テシホいしきさる金しりえる其金を
其四分の一々八分の一々或は十六
分の一とら又二十分の一々必ず
其内は他物混和しきと知ふ所
し一塊の金をとりし製煉家
精製術を施し而して後其金
の分量以前より少く其二十
四分の二を減少せしむるは其をい
ふ其金を純金二十二分標物二

か混和しつらと知ふ所し即ちこれ
を二十二カラリのゲバルテ貨の金
とすし儲又銀を大小分量かきし
一塊一石を姑くかき十二分とす
此毎分をベニニクと名つ
此一ベニニングと又二十世ゲレイ
ホカハ一塊銀の内分量四分を
取て是を鉛と加えケイブルに投
し其を錠化し而して後鉛を吸
化し其を所の銀以前のし四残

Penning.

何れ時を是耶ち純銀ありしは
 を十二ペニンニングの「ゲバルテ」の銀と
 しふまゝ其四錢の内十二分の内
 り或ハ二を減り時を是を十或
 を十一ペニンニングの「ゲバルテ」の銀と
 しふ即純銀十々十一分ありし
 除けば穢物あり者のし「カラー
 止又ペニンニング」としふを分量
 隔らと一塊のうちにを志えらるる
 所の名號あり

金銀の「ゲバルテ」を鑒定するハ官人
 有司の業あり此者司ありし
 金銀匠の二十曲「カラー」以下
 を十二ペニンニングと下りし銀を
 取扱ひしを賣りしを禁む是を
 通用の金銀錢を鑄し細工等
 不用しさらしめん為らる

按よりよ金貨とありし銀と
 其位下しふ物あり哉

金銀匠等 矧バルテシの劣き不物を
を精製し〜細工より用ふ不材
必其損込りり志くれも彼〜
ゆく〜び 鑄化〜 精製〜 其
分量等の減少〜 損込りり
所を猶補ふ術あり〜 見ゆ若
〜 又尋常の品の〜 其品
位勝まさりものありバ此は他物
を加え〜 尋常の普通の品位
とあり〜 其上品の物を少し

く掠免取ふ是も匠人の利あり
とあり 所あり

七金譯說附録卷之上終



七金譯說附録卷之下

Bank. 劫^ケ列^レ鹿^ル古^ク諸金礦の部下

一金匠の自^レ金を賣買する事
^ヤ銀行^シ者より重銀を
 匠人^ニ共^ニ造りしむ
 其金銀以前の品位を量し

符合する如く小銭を製造する
事能くも或る泡の如くその他
物は附着し或る火中よりあは
れまば彼等も其損込をある法
を犯すことをある故に其分量
及び品位も大體よ符合せば十
分ありとして許し可くする
即ち我邦ありハ匠人より十一
ペニングレ十八グレインの銀を
納むる時も是より六グレインの

純銀不足するも上品の銀
を納むるも其不足を許し
此免許は匠人の難澁損込せむ
んが為なり此免許をレメー
と名は久是は品位のレメー
と分量のレメーをレメー
蓋し品位のレメーをレメー
コストト上及びコウ井に
も二十ニカラート上を
も其位二十ニカラート上と四カ
共の金
法と
れ

一ト止の三ツク時と良と一と
分カラー一止の一をゆりとらり又銀
銭と水ハ其位十一ペンニクを
通例ととも然まとも其位十カラー
ト二十ニダレイニ止の時と良とて
郎二ダレイニ止とらりの位劣とらり
許とらり

Mark.

一マルク^クの金銭と十四ダレイニ
とらりの欄、許とらり又一マルク^クの銀

銭とらり四十三ダレイニ止とらりの欠を
許とらり量と分量の「メーテ井」
と名はく若し是の定法の「メ
ーデ井」^井とらりハ其品位及び分量
下る時も國法を犯との罪と因
り其匠人を罪と其位十七カ
ラー止とらり下ら物と極悪品の
金銭とらり又金銭と其位十二カ
ラー止とらり下ら物銀銭と六
ペンニクとらり下ら物と量と

ヒリヨーンに名く徳金を製煉家
あり製法を所をむむ此の他
の事を説き終りしれバ又古は
金の性質及び用法を説くを

金を以て諸金の長とむる所以
は質密實なり其重く字眼
を尤も密なり其みま純粋と
ありてぐくも最も美なり其光澤

火炎の似たり不能く鑄るが故に
延び固しあり何れを寄らんと其を
以て造るふに後し又他の諸金
の如く曇り生ずる事あり何れ
固し是を附着せれば其潤澤
を増し美麗とらるる其を貯ふ
る時と不知業内の道路もよく
照らしむるを以て此外は他の諸
金の及むる所を精をまじると
ありて火を授けり其分量少

し減少の事なし

賣買日用の金用は、數年を
経るも、しるも其質を變せず、
諸金の長さを以て、
の如き貴き金を土中に掘り
出さる以前、俗間の通用する
酒を以て、油を換へ、
代つて、唯其れ餘きを以て、
の餘きあるものと換へて、

豆を禱ふの、甚自由あり、
我も隣好の人も、共に、
を貯ふ、酒中、果實
多き時、交易の法、行なはれ、
甚不便なり、又、交易、
分の物を、必要の品物を、
欠く、極め、法、
純潔、
易の徳、
交る、用、
交る、用、

最上の善貨なり又此品最も
貴し小固き少きを以て多量の
貨物と代ふなり

又是をよまると懐よる時
煩勞なることあり此寶を貯ふ
こと人小見くこれが盜難の恐も
なく金く世界をも遍歴して

又此金を以て何小固らざる我欲する

物を以て極く斯の如く簡便法
あり自由なる故に金銭通用
の法満世界を行く

又此を以て交易賣買の其時
秤を用く其分量を計る故に
甚く煩くなく故に毎國小於
其官長より法を定め其匠小命
し分量品位を定め大小の
錢を造り國號を記し其

常價を定む故に賣買の取遣
の節亦甚便利なり

又云、ワの雜用する金より、ハ多
く、ワ銀銅を以て錢を造るに
て、日用を辨と、ワも、ハ錢の始
り、ワ此の外、金の徳を尤も説
く。

世の美なる物多しといふは、ハと金

小勝る物あり、ハ匠人を以て其
法に因り、ハ漸を加ふ、ハ時ハ其光
澤美、ハ人々の眼を驚
かす、ハ匠人を以て、ハ詠品物
を造る、ハ悉く皆貴重を、ハ珠玉等、ハ
是を以て、ハ加え、ハ物を造る、ハ時ハ其
光澤を増し、ハ絹布
毛布等、ハ附け、ハ草花禽獸の
真形を、ハ附け、ハ其、ハ銘、ハ
あり、ハ又、ハ鑲嵌、ハ匠人、ハ金、ハ石、ハ木、ハ石

すい。獸皮等も鍍し或は貴官
の殿中及び寺觀等の壁柱も
鍍し其室を輝りし美觀
を設くるの用なり

乙のいさ。何るを以て鍍金
しる物も数年の尙風日は晒
せしむるも其光澤を失はざり
これ其本質を存するなり

甲のいさ。是も永久不易なる金の
質と鍍金匠の妙術とふなり
なり

乙のいさ。我々我々其法を教
示する鍍金匠を得ば我々の田
舎も偶居するを歎む

甲のいさ。汝今都會の地は至
らざるも汝も我々を見えり

都會の於ては諸匠人の鋪店を
巡見あるは甚く是れ其のあり

乙のいふは我今別々知り得ん
るを欲するは即鍍金匠等銀
銅の類の鍍金しる重器と見
せ又鉛錫木石の類金よりせらる
物に鍍しる真の金器と見せし
あるの法有り我是を頻りに求
むるなり

甲のいふは鍍金を賣ふ良法有り
其法を以て理會せんと欲せば匠
人の為は所を以て人をつけし
意を用ふを以て尤も其法の大
體を示すなり

鍍金しるは粉金と延金とを
用ふ銀及び銅の鍍しるは粉
金を用ふ其粉金の製法ハ重
を王水に投し末とを此末を

取_レ 坩堝_ニ 入_キ 火_ノ 小_ノ の_レ 砵_ニ 是_ニ
八倍_ノ 砵_ノ の_レ 水銀_ヲ を_レ 加_ヘ 土_ノ 泥_ト
あ_レ 是_ヲ を_レ 草_ニ 入_ル 漉_キ 土_ノ 泥_ト
水銀_ヲ を_レ 外_ニ 入_ル 漉_キ 土_ノ 泥_ト
の_レ 泥_ト と_レ 土_ノ 泥_ト 内_ニ 入_ル 漉_キ 土_ノ 泥_ト
の_レ 製_法 尚_ホ 法_{アリ} 是_ニ 土_ノ 泥_ト を_レ
打_ノ の_レ 砵_ニ 入_ル 漉_キ 土_ノ 泥_ト
小_キ 土_ノ 泥_ト 切_リ 是_ヲ を_レ 土_ノ 泥_ト
入_キ 是_ニ 小_キ 土_ノ 泥_ト の_レ 水銀_ヲ を_レ 加_ヘ
條_子 を_レ 以_テ 攪_勻 土_ノ 泥_ト 和_ス

此_ノ 金_粉 其_内 入_ル 漉_キ 土_ノ 泥_ト
丸_ノ の_レ 如_ク

一_ニ 先_ニ 其_レ 鍍_金 土_ノ 泥_ト を_レ 取_リ
磨_キ 土_ノ 泥_ト 置_キ 土_ノ 泥_ト 入_ル 漉_キ 土_ノ 泥_ト
銀_元 八_分 入_ル 漉_キ 土_ノ 泥_ト 入_ル 漉_キ 土_ノ 泥_ト
五_分 滴_ヲ を_レ 加_ヘ 土_ノ 泥_ト 入_ル 漉_キ 土_ノ 泥_ト
け_レ 其_レ 鍍_金 土_ノ 泥_ト を_レ 白_銀 粉_ト
白_く 漉_キ 土_ノ 泥_ト 漉_キ 土_ノ 泥_ト 入_ル 漉_キ 土_ノ 泥_ト
後_ニ 土_ノ 泥_ト の_レ 金_粉 を_レ 刀_尖 を_レ 以_テ 取_リ

己是を鍍せざるに上より敷せ
置きしを刷毛の類を以て少くも
透向なく一面に延べ附けし火
少くはつぶさるる時を水
銀を蒸かす金の上より留
るる

又一法は其鍍せざる物を最初
二三度火に焼きし水銀の
炭を以てまじりし温め置き

而して後其温るる間に
金泥を貼し刷毛を以て延べ
し時を水銀を漸く茶散し金
泥を以て延べし火勢を以て
水銀を悉く茶散し終る其後
を以て貯へし尿の由へ入る刷毛
を以て撫てしを以て而して
後小光澤を出し金糸の美麗
なる法を施し其内は
金のいろが地金の色に
なれり

所^レ行^ハハ是^レを以^テ其^レ所^レを磨^ク
き其^レ所^レの^レ前^レ法^ノ如^クし^テ
鍍^ルに^ハ魚^ノ重^シ泥^ヲ用^ヒ鑄^ス
の^レ法^{鑄^ノ字^ヲ粘^ハス^ルノ^レ如^ク}

借^テ亦^テ重^シ竹^ノ泊^ヲを以^テ鍍^スる^ノ法^ヲ其^レ
毛^ヲ顔^料を以^テ六^分セ^テ膠^水を以^テ
鍍^スる^ノ魚^ノ物^ニ塗^リ置^キ其^レ上^ニ
よ^リ箔^ヲを貼^リる^ノ如^ク

此^レ法^ヲ風^雨に晒^シと^シて^ハ物^ニ施^ス
る^ノ如^ク風^雨に晒^シと^シて^ハ鍍^スる^ノ如^ク
一^ト年^ヲを以^テ麻^油を以^テ
製^スる^ノ如^ク粘^着強^ク油^製顔^料
を以^テ最^初に塗^リて^ハ箔^ヲを以^テ
乾^キと^シて^ハ竹^ノ泊^ヲを貼^リる^ノ如^ク
貼^リる^ノ時^ニ能^ク附^着する^ノ如^ク

甲^ノの^レい^ハ金^ノを^レ甚^ク少^シま^スる^ノ如^ク
り^テ志^スる^ノ如^ク所^レに^ハ金^ノ造^リの^レ如^ク

多し且つ是より用ひし上ハ漸く減じ
處し去る水が又格別少きものとも
思われざるなり

このいとも最もし純粹密實なる物
ゆへに少く延びるを魚一板一小
片をそのうへに薄く延びし時
意外に廣うりて甚大なる盤面を
覆ふるす斯のいともく延びし
且其性変せず家の亭のりを以て

此を用ひしを字を饒多軍一を
あし

金箔師及び金絲匠は金を各
いとも少く用ふ事と妙を以てり
其少るるを以て廣く延びし
を實驗せしむるが其説信を以てり
ざるがごとし匠人等と唯已が術
は用ひし是を延びしと
いとも實に金の純粹密實なる

が
あがり

重紙箔を裏表をわたりてとくが二十
四錢の純金を取らうと溶化し
て一挺よるし是を積礎の上よ
置らうと紙のしきよ打延を
而しう後よ此を凡一寸方は断
ち是を書丹の如くかゝる四
角より二重の重紙の間よ狭
しころムル石の上よ載せ其厚紙

の大ききふしむるやうに大槌を以て
打延をなすに既よ此大ききうの
延がぬが取出しと此四ツよ切を
わらち又初の如く紙の間よ狭し
て打延をし又四ツよかけし亦子
延をなすと此際斯のしと延して
ハ切を切しと延をなすに
教添よ及んて後半腸の甚し
薄く延しとる物の間よ狭し
しと新のしと打ち延を時と

groupen van registers.

二十四分方の三つ丸の銀挺を取
り是れ重廿四錢の金箔を火力
を以て鑄し貼るふテレツキ丑イ
セ止と名はふるものなり是れ圓
鋼鑄棒、棒心ニゆるぎ孔を貫通
し、ゆるぎ其孔を口の方太く端
の方漸く狭く此内は若の鑄重
なる鉄棒を口の方より強ひ、
入き末の方より出し其先の所を
引イブタンゴ子鉄を以て棒を引出せ

Nipp Lung Kabel.

重廿八錢一葉の金箔の槌力小圓
く延び得る膏即四寸方より物不
葉を得る是以前の大は此より
む其延び、所十五葉倍と云
かり
又丸の尚方術を示る處、是れ
甚容るると云ふ所、かり
金絲匠と長廿二尺八寸あり、周

但し此引イブタンダ大綱るカベルト結
ひけけ此大綱も万力車も通也
數人の力を以て此大綱を引き
以て其銀棒を舌の綱鑊を管内
より引き出し又他の孔の小さき
管は漸く移しそのゴルディング
ノ大さよるしそれよりロイクヘー
ト止の大さとするし又太絲の大さ
るし終よハ毛條の如く細糸と
るし其大小孔の管の數凡一百四

十箇漸く其小孔る物も轉し
用し此内より毎蠟を塗らる
絲のゆく通し出さるべきよあを
者のこも長サ二尺八寸厚サ八分
の七分の銀棒を引き延ぶる時
三十萬七千二百尺とらる是即ち二
十一里餘なり又是より尚細小
引き延ぶるし即ち長サ二尺厚サ
一尺二十九分の一なる銀棒を以て
引き延ぶるし絲とる時長サ一十

九萬六十〇四尺とらるる七十三里餘あり。

又云此術を以て四錢の金を一銀挺よ録し長サ七十三里餘の絲とらるる其金周く延び亘る少くも金の覆はざる所あり僅り重サ四錢の金斯のこく延亘る豈奇ありんや

右のこく絲とらるる物を鋼鏡の棒に巻き付け他の同じく鋼鉄棒を以て相推し時を其締壓扁とらるる時を其七十三里餘の金絲とらるる扁平なりとらるる物とらるる此両面の長サ合とらるる時ハ一百四十六里とらる是即重サ四錢の金の延びる數なり此面の幅サ十八方寸の一とらる平方面とらる時方四百二十三ルーデの面と

が量半マルゲニと一十二三
トかーと即四錢の金の廣り
ふ所が

Goldmünzen.
又云此絲の面の幅は二十四分寸の
一と五分寸と半マルゲニと十七
ルーテ四方を覆ふる金の斯
のこゝ延びて返る事神妙は
一と五分寸と五分は堪へる事あり
まや

甲のいそぐ金の性質と純く人智
の及びざる窮理とを論じしむ

乙のいそぐ金の本性質と古来の
賢哲いかに窮理し得ざる所あり
金絲を扁平よきとすべしれを
結糸は纏ひたり用おシラしに
匠人も術を以て結糸の表よき不
半面の所にて金絲を中よりめり益
を討るるなり

銅を心よ為し金絲を造ふこと
なり是を右ま所謂テレツキエイスル
を以て引き延を以て前よ中川よの
銅推よ數葉の銀箔を貼し而して
其上よ金箔を貼しこれを引き
き延をさう即ち銀箔を銅よつひ
て延ひ金箔を銀箔よつひて延る
真の金絲小等しく見ゆさう右
これら打ちて扁平とさしてても
緒系ハ纏もむ綿系ふやうおさう

甲のいさく他の諸金を全のいさくハ
延びさうや否

乙のいさく金を延び延きりの最
上り銀を金よ次ぎ銀を銅よ次
ぎ真鍮を錫よ次ぎ錫を鉛よ
次くさう

甲のいさく黄金の説を既よ聞く
事をさう尚請ふ他の諸金の

説を聞かん

乙のいさく先哲グリニウスに於る人の
銀山の説あり汝これを知らんや
如何

其説よいさく

marcassiten.

銀のいさく玉中より時々光澤
あり其所在知ふと疑し

毎次よマルカシテに鉛の中より
混りたりと知り其質を脆く
色青をざるなり或は鉛色を
みせる一種の石のときさよの知り
郎ち此を以て銀を製し
取ふことを欲し熟煉せりと
さう志くれとも西墨利加洲の地
あり字露及びポトシの銀山又
獨逸邦国内の銀山あり此石
及び鑛石の脈理より光澤を見

くく附着とれハ甚小容易
見ゆらる又時とくハ石の脈
理及び其外は枝蔓をあらく
けくこれ出さるり又絲條を
あらく散在するも甚小
又塊をあらく他物やぐら
純粋あらるり其塊或ハ三
クレゲルハ料量あらり或ハ
ハるるり或ハ教多マルク
りりクレゲレツキ第三世帝の

代りりクレガ子ハ此地の坑山
甚小大るる銀塊を堀り
せり

自説ハいさハ此時堀り出せ
銀塊ハ重サ四兩斤りり
ハ

倍銀を都々マルカレテハの
内ハ蘆蓄あらるものなり其マルカ
レテレハハふらると金と混交

〜長條の絲理をみる〜する者
はる

自註のいさく其炭條の長理
を本と一ツり〜する人漸くは
教理より裂く〜するものなり

カルクシテにの斯の〜する質を
あると所以をこれと考ふるは
蓋し銅或は鉄を合〜する
土壤を銀等を合〜する胆礬性

の水液を注ぐ時とあつゝ
解け流す〜する此水液
は酸の性のまゝ銅鉄のまゝ
〜する透入〜する回亭お求
るの性有り故に此亭物に透
入〜する一直線は侵入も然も
其相求不性有るを以て此液は
孔より透入するといへども其通
路漸く透入する小随く相求
る〜する炭條の道路終るは合體

しし一條とあり但し此液は漸く
下底に滲透し銀を遠く
下底より事なくしし其
酸液の通路は留在らざり
銀を此液の通路に留る
ししを以て本一かしし末は
條に分裂し此液を以て酸液
の通路を即ち銀の脈理と
し知るる一若し此流の透
入より通路は支障あり液は

より又諸方へ向て流るる銀
脈の枝蔓をあらわししを
これよりコルカーニテに其質
を為ししものなり即ち此の
しし此上より又他の金脈を合
する酸を重なる時始の如
くよりより銀を合しし酸液
銅塊は注ぐ時銀を内より
入るししなく外より注ぐ液の
内より透入しし銅を合しし

酸液鉄塊に注ぐ時を銅より
内より透入しつゝ外に残るる
可ルカセイ止の條理本一より
未或は十字或は横或は斜
に相交り且其色の種々なる
らに如くある即ち考へ説く
所以なり此諸色を漸く
累積しつゝ状態をなせし條理
を見つゝ以て金脈の至る所
を見ふ所なり

尤も鑛石及び可ルカセイより銀
を製し取る法を示す也

鑛石を以て銀を分解し取るの
法は前記と金を製し取る
と其法相等し即ち鑛石を取
りて搗き細末にして水銀を
加へて泥とする器に入れ置
き其上に水を加え其泥を解
き此を毛布の袋に入れ濾し
其

水銀を絞ると其袋内子残りゝふを
火中のあせり尚其内子混和し
水銀を蒸散せしむる時ら銀のこ
残ふかり著し此銀の内子他物
混和し其時ら銀を如えり火よ
り縮し術を以て其混和し
銅をよび此他の物を除く去る
なり

金の重サと銀の重サとを比例せ

たり小銀と重サとを十一と二十との
如し一銀丸なり重サ十一
ルと又一金丸の銀丸と同等なる
大サのものなり其重サを二十
クし其銀と又其價を比例せしむ
時を一と十四との如し即ち一
クこの銀を價二十四とせしむ
るはよ一マルクと重サ其價右の十
四倍あり三百五十マルクに
なり官長より設け置かば所

借銀の用法を俗人の知る所を
か爰に説とぞらるる

銅、赤銅と黄銅の二種あり
其始は山中に於て掘り出
る時石内或は土と混り或
は混和しあるも有り人これ
をとりて數度法に従ひ鎔解
する時おのつゝ金をとめと
る赤銅と名づけしを鑄造を

く亦く打延と為さるるを上品
と諸國皆是を産せしと蘇亦
齊、西の産を最上品とす赤銅
を鎔化し是を等分の極末に搗
きとふカラマイに石を

自註ゆいよくカラマイに一種
の土を火に焼き清淨ゆるし
よふものなり

文へ賣る時其銅殖と且其色

黄毛の皮を是を黄銅又トトク
此名はく此石を交へ黄毛子
ありて銅を其粘りを去りて
くうら延びるるを黄銅糸と造
る黄銅糸ハカラムイニ石を少く
所ハ不すり黄銅糸赤銅糸ハ鑄
を生じること少く又炉口ハ晒
といえとも速に異毛よろる事
これハ器具物を造ふに用多し
是ハ鉛を少く交へ鉛を少ハ

能く延び鑄造を造る

甲のいそ 西里利加洲ハ於て航山
を造る事金銀を多く出さし又
陶器の造法世ハ弘き事ハ以
て世ハ銅錫を用ふ事ハ造古
らりて甚と少

乙のいそ 銅錫の二金造古の事
用ふ事ありといえ今ハ於

此を用ひし物を造り其用は適
に居所の去数万品有り等し此
二金ふらんバ其文障多うるをし

赤銅及び黄銅を厨房要用し系
大小の罐子釜鍋等を造ふの料
より是酒造家謀匠鑄師等の
要器とす此バ須臾も測く事なし
とす志るふよ銅は空中自然に
合者より硝石の事銅の事眼より入

是を侵蝕し且錆を生せしむ
故に別々赤銅器の事といハ部々
沿鍍錫し用ふる即ち錫
ハ銅の事眼を掩ひ塞くものなり
故に錆を生じしを防く故に
食物を煮る吟ふ魚し何とあれ
む銅の錆をスバーンスグルニ緑トと
名をす醫家よりハこれを内服せ
し免く功を巧むといえども少許を
用ゆられ毒なるものありたりとす

み洞と甚しく打延るるあり
板とあり萬品器具を造ふ又画木
偶匠等小於るハ是を必用の物
とす

カラメイに石を交つて造るる
銅と甚粘り易きを以て物あり
み赤銅の如く推を以て打延
し難く尤溶化し難く流動
ありあり様に入きく鑄るるし

み金剛砂及び錫灰を以て磨く時
ら金尖を出ると又絞車（キリコロ）を以て磨き
み割るるありあり鑄鋼像を造るる
月け又清を出ると車とありあり自鳴
鐘等此他（その他）の器具を作るの料と
るると此を用いて造るるありあり自鳴鐘
の車輪其齒刻細密なりとありあり
七八十年の頃と損るる事ありあり
夜廻轉とありあり

赤銅は黄銅を加え調和する時
一種の金と若干をブレロニスと名
付く偶人及び諸物象を造るに
甚適宜の料と今通用する銅
錢も此を用いて造るものなり

此ブレロニスより少く錫とスピースグ
ラスとを調和する時と鉛を造るに生
し削るものなり又其中より針
眼とあるものなり此を以て銃撞の

火炮を造るなり又此ブレロニスに百斤
より錫二十五斤を調和し其物を
以て鐘を鑄るとさう其音甚し
純く響くなり

錫と鉛と同一く白色なり其重
く軟くし其延を益し其色の赤
銅黄銅亜鉛及びビスニツト等を
加え調和する時と種々其質を異
にする諸金を造るなり

錫と諸品の器物を造るに用ゝ又
銅と鐵とを鑄し其の毒を壓之
止む又此を用ゝフーリイシを造る
此は水銀を粒し硝子版に附け
不時を鏡と云らる

錫は鉛を交和しうるにアルゴル
の管を造るに用ゝ笛と云ふ

鉛は管を作りて水を高處より低

處より引きおろし低き處より敷足
を設けしこれより水亦高處より
昇りしこれ王侯貴人の庭園中
設け美觀快樂と云ふ亦井の深
底或は承雷^{アキカミ}よりローゲンポンプ
と名つくる雨受けの臺より雨水
を揚る機器の内より引きおろす
の管より作り用ふ

此物葉片より打延びし牆壁より

張り亦家法を背くの料とあるを
これ兩の漏れと腐朽とを防ぐが
ためなり松の最又大要用なり
刷印字を鑄造せらるる用也即此品
は錫鉄少許を交へ和しし作
らるれを以て数千要用の書冊活
版と為さるなり

甲のいとも其既よ黄金の徳用を称せ
余も又思ふよ此物諸金の上なり

これよ優きものなりよし

乙のいとも實小然も志れも其實
用よいなり其鑄小如くそのよし若
し此物ありしはより人生民用を欠
く事のみあり一日もあらんが
あふ
無きと云ふものなりよし

鑄の功德及の誌重の理論
條あり幸篇と大目小異なり
姑く譯文と云ふものなり

七金譚說附錄卷之下終

五十七